

環境とマイノリティ 先住民族の知恵に学ぶ

阿 部 珠 理

本日頂いたタイトルは「環境とマイノリティ」、「先住民族の知恵に学ぶ」という副題をつけてありますが、基本的に私の報告は、現在われわれが直面しているたいへん深刻な環境問題、ならびに未来の文化創造に向けて、先住民の知恵、あるいは先住民の自然観、先住民の伝統的な思想がどういう貢献をし得るか。その一つの指標としての先住民文化ということでお話ししたいと思います。

きょうは四つの軸に沿って話を進めたいと思うのですが、一つは、先住民がどういう自然観を持っているか。次にその自然観と合わせて、そのなかに見られる癒しの概念がどういうものであるか。3番目には、癒しや伝統的な思想が現実のコミュニティ、共同体のなかでいかに生きているか。どういう形で表れているか。最後には、現在、マイノリティとしてのアメリカ先住民が直面している環境レイシズムという問題について触れさせていただいて、話を終わろうと思っています。

1. アメリカ先住民の自然観

アメリカ先住民は、人口でいいますと、2000年のセンサスでは約250万人ですから、アメリカの人口の約1%、たいへん小さなマイノリティグループに過ぎないわけです。彼らは先住民ですから、もともとあの大陸——旧大陸が「新大陸」と呼んだ現在のアメリカ大陸の先住民で、主であったわけですが、そのころはどのぐらいの人口がいたか。ドビンズという著名な人口動態学者によれば、最大統計で1,500万人ぐらいの先住民がコロ

ンブスの到達時にはいたのではないかと考えられています。

その先住民が400年の後、20世紀初頭には25万人にまで減少します。その減少の過程に今日は触れる時間はありませんが、皆さんよくご存じのように、大変な迫害にあつて、彼らは20世紀の初頭にはパニシング・レイス、「消えゆく人種」と呼ばれるまでになりました。しかし、ここ100年で大変な復調が見られまして、100年でだいたい人口が10倍になっている。その背景は今日はお話しできないのですが、非常にめざましい復調の途上にあるということだけ、申し上げておきます。

しかし、人口的には非常に少ない先住民が、最近脚光を浴びています。皆さんの日常生活のなかでも、よく先住民に出会う場面がおりになるのではないかと思います。つまり、1960年代後半、1970年代以降の環境運動との関連で、アメリカ先住民が語られるようになりました。アメリカ先住民が培ってきた伝統的な思想や自然観が、アメリカの環境保護運動の思想的なバックボーンの一部を提供していると考えられると思います。

今日のアメリカにおける環境運動、環境意識の高まりにも、アメリカ先住民の伝統的な思想がかなり大きな貢献をしているのではないかと考えられるわけです。現実的に、先住民思想が再発見されていく過程が、20世紀に明らかにあるわけですが、それは1960年代以降に非常に活発化してきた公民権運動との絡みを忘れることができません。公民権運動の流れのなかで、さまざまなエスニック・グループが自己の出自、アイデンティ

ティやそれぞれの持つ伝統文化、もちろん市民的な権利の復活などを目指す、非常に大きなうねりができてきて、この運動を総体的にエスニック・リバイバルと呼ぶわけですが、このエスニック・リバイバルの流れのなかで、先住民思想が再発見されてきたと言えると思います。

このあたりは私はたいへん関心を持っていて、先住民の文化創造、先ほどの町村先生のエスニシティの創造という観点にも関連があって、1960年代、1970年代は文化創造の側面が非常に大きいのですが、きょうはそれが主題ではありませんので、そこには立ち入らないようにいたしますけれども、1970年代以降特にネイティブ・アメリカンのエスニック・リバイバルが、ニューエイジ・ムーブメントと接合するような形で非常に勢いを増していきます。

ニューエイジ・ムーブメントもきょうは詳しくご説明する時間はありませんが、新たな精神主義運動ですね。ことに西海岸で活性化したカウンター・カルチャーのなかで勃興し、日本では「新霊性運動」などと訳されていますが、ニューエイジャーと言われるニューエイジ・ムーブメントを支える人々と、ネイティブ・アメリカンの接合が非常に顕著な形で、やはり1970年代、1980年代に行われてきたと思います。そのなかで先住民の文化、先住民の自然観が、白人社会のなかでも再発見され、また非常にスポットライトを浴びて登場してきたのだと思います。

このあたりからいわゆる先住民思想と環境問題、環境保護運動が、明確な結びつきを見せるようになってきます。1969年、1970年頃から、たとえばアメリカのテレビを見てみると、レイチェル・カーソンが出てきた後ですから、もう環境問題はかなり意識化されているわけではありますけれども、環境問題をどうあつかうかというときに、（実はチェロキーはウォーボンネット、羽根冠などかぶりませんので、ここにはたいへんなインディアンのステレオタイプがあるのですが、）たとえば羽根冠を被ったアイアン・ヘイズという

チェロキー族の俳優などが画面に登場してきて、涙を流す。大気汚染、車が排気ガスをウワッと出しつつハイウエーを走っている。そのそばに立ったアイアン・ヘイズが涙をポロポロと流して、私はこの大気の汚染のひどさに耐えられない、そういうメッセージがかなり多量に流されていくようになります。

いろいろな環境団体もインディアンを一つの自然のシンボルとして、このあたりから使用するようになってくるわけです。インディアンはそういう形で表象されてきますけれども、その調子がずっと続いていって、1990年代に目を向けると、さらにそれを加速するような形で、1990年代は世界的に環境運動が根づき始めたところですが、1991年9月でしたか、5ヵ月ぐらいにわたって、「ニューヨーク・タイムス」の書評欄でずっとトップを飾った本があります。それは『ブラザー・サン・シスター・ムーン』という絵本なんです。日本でも『チーフ・シアトルの言葉』という題で絵本として出版されていますが、この本がアメリカで5ヵ月にわたってベストセラーの1位をキープするという現象が起きるわけです。

この絵本には底本があります。皆さん、ワシントン州のシアトルという都市をご存じだと思いますが、そのシアトルは、当時、ワシントン州に居住していたドワミッシュ族という先住民部族がいて、そのドワミッシュ族の族長の名前なんです。ですから、シアトルという町は、彼らの土地を奪った後にシアトルの名を冠して誕生した町です。そういう町はアメリカに行けばたくさんあるのですが、しかし、シアトルが土地を割譲するときに、州知事のスティーブンスに向けてスピーチをしたというのです。これはちょっと怪しいところもあるのですが、それが1870年代の「シアトル・スター」という新聞に出ています。そのスピーチが底本になっています。

それはとてもいいスピーチなんです。そのスピーチが非常に多くの人々に受け入れられました。日本でも「自然生活」という通信紙がありま

す。エコロジストというか、ちょっとシニカルな言い方をすると、エコひいきの人たちが好んで講読するこの通信紙に、あるカトリックの神父さんの手によって訳されたものが出て、今では日本のエコロジストのバイブルみたいになっているパッセージです。

先住民はそのような形でエコロジストのイメージが、ステレオタイプと言ってもいいものが再生産されていきますけれども、それはもちろん単に創られたものではない。故のないもの、根拠のないものではなく、根拠はきちんとある。それは何かということ、やはり一つは、先住民族の伝統的な自然観に求められると思います。

先住民は、欧米社会とは甚だ異なる自然観を持ってきた人たちだと思います。西洋社会での自然観を語るとき、よく言及されるのは「聖書」でしょう。「旧約聖書」の「創世記」にこのようなパッセージがあります。人間は、皆さんよくご存じのとおり、神のかたちをしたものを神が人間として創ったということになっていますが、人間を創った後で、神はその人間たちにおっしゃいます。「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせしめよ、また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物を治めさせよ」というとても印象的なパッセージです。

つまり、人間は神によって創られますが、生き物の王として地上に最初から君臨しているわけです。人間は己の繁栄のためには他のものを従わせること、自然に手を加えることを初めから許された存在であるわけです。そのような自然認識を欧米社会は、非常に長い歴史の中で培ってきたと思います。それを形容して言うと、人間を頂点とした垂直的な社会構成になっているわけです。

翻って、先住民のほうを考えてみますと、先住民の自然観は、基本的には、私たち人間は大宇宙の生命連鎖の円環に位置する一つ存在に過ぎない。端的にいえばそれが先住民の人間観、自然観であるわけです。太陽もあり、水もあり、大地があり、植物があり、動物があり、それらがみんな

つながって、お互い支え合っているからこそ、世界に絶妙な調和が保たれていると先住民は考えます。

彼らの言語がそのへんの事情をよく表しているのですが、たとえば私は、佐久間先生がスー族語をしゃべれるとおっしゃいましたが、とんでもない、本当に片言程度。宗教儀式に出るときに、儀式言語だけは知っておきたいと思うので、そこは学習しましたけれども、そんなにできないのですが、彼らの言葉は、たとえば種族を表す言葉がありますね。人間とか、鳥とか、動物とかあるわけですが、基本的に生き物は四つのカテゴリーになっています。それは2本足、4本足、翼を持つもの、地を這うものという分類なんです。人間は2本足に入っていて、その2本足グループになぜかクマがいるのですが、そのカテゴリー、グループにはすべて、オヤテという言葉をつけます。ラコタ・スー語でオヤテという言葉を使う時は、ネーション、ファミリーあるいはファミリーの拡大したものという認識です。

ですから、生物、無生物に限らず、たとえば木のオヤテ、岩のオヤテといった括り方をします。つまり、オヤテは非常に水平的な彼らの世界構成、存在の認識を如実に表しているような気がします。しかも水平線上に並んでいるものが、円環状につながっているという発想です。すべてサークルなんです。サイクリックにもは運動していきますが、円環状につながっている。だから、この円環でつながっているものが一つ欠けてしまったら、円が壊れ、円環が途切れて、自分も他者も生きられなくなるというような考えを持っているわけです。

民話を少しご紹介しましょう。このような発想を表した民話はいくつかの種類があります。人間はオヤテとして他のオヤテと共存して調和的に生きてはいたのだが、その人間が、強い自我を持ち始めて傲慢になった時期がある。その傲慢になった時期に、彼らの世界にはワカンタンカという創造主がいるのですが、その偉大なる創造主が、そ

れに非常に腹を立てて人間が住んでいるところを水浸しにしたという、ノアの方舟と似たような話、あるいは、他のオヤテが傲慢になった人間を地上から追放しようとして談合をして、その結果、競争という形で決着をつけようとする。そのとき人間はカササギという鳥に救ってもらう。そのような形で、人間と他の動物が共存しているという考え方は、彼らの生活なり彼らの民話なり神話のなかの至るところに見られます。

環（輪）につながっている1人でも欠けると環が切れるという発想、この環のことを「聖なる環」と彼らは呼びます。セクレット・ホイール、「聖なる環」と呼び、この教えを常に日常生活のなかでも意識のうえに上らせておくような工夫がいろいろあるわけですが、その点についてはもう少し後でお話しします。

たとえばこの自然観では、大地はわれわれを支えてくれる大切な自然の一部なわけですが、大地に対する考え方も西洋と先住民世界では甚だしく違います。コロンブスがやって来たときの話ですが、コロンブスが「新大陸」を発見した後、実際に入植が成功していくのは1600年代、17世紀の初頭を待たなければいけません。アングロサクソン系の人々がアメリカに徐々にやって来るようになるわけですが、やって来た人間を見てインディアンたち、先住民は非常に変な人だと思いました。なぜ変な人だと思ったかということ、自分の土地を何かで囲っている。何のために囲っているのだろうか。先住民の言語には柵という言葉もありますが、その意味が、先住民にとっては不明です。先住民にとっては土地は共有の財産ですから、それを私有するという観念はなかったわけです。

そういうふうに変な人でもあるし、余談ですが、白人をすごく野蛮な、不潔な人だと思ったみたいです。それはなぜかというと、白人は臭いというわけです。白人がいるところは、すぐわかると当時の族長が言っています。なぜかというと、彼らは臭うから。

ブリマスにプリモス・プランテーションという村が再現されています。私はそこへ行ってわかりました。トイレがないからです。トイレがなくて要するに、夜の間に、排泄物をポットにためておくわけです。そして、朝になるとそれを窓から捨てるわけです。だから、芬々たる匂いがしていたのでしょう。先住民の人たちは非常に嗅覚が発達していますから、匂いが漂ってくると、あそこに白人がいるとすぐわかるわけです。

このように大地、土地に対する考えも、西洋社会と先住民の社会では甚だしく違うものがあつたわけです。土地は共同体に命を与え、共同体の命を存続させてくれるもの。しかも、土地は7世代後の子孫から借りているものだという発想です。未来の子孫からいま借りている土地ですから、次の世代には無傷で、最良の形で残していかなければならないと考えます。

2. 癒しの思想

大地に対する考え方もたいへん異なるわけですが、さらにその考えのなかには、非常に重要なコンセプトとして、「癒し」という概念があります。この癒しという概念も、ニューエイジャーとの接合を非常に加速させました。新精神主義運動、新霊性運動とかかわるところなんです。今は流行りですね。何でもかんでも癒し、癒しと言うわけですが、この癒しという概念は、先住民社会では「力」の概念と同列のものです。

つまり、われわれが力というと、肉体的な力みたいなものを想像しますが、精神的な力と言ったらいいでしょうか。大地も、人間も、4本足のものも、翼を持つものも、それぞれが固有の聖なる力を有していると彼らは言うのです。聖なる力に彼らはメディスン、薬という名称を与えるのですが、この力のやりとりが人を癒していくという発想をするわけです。

メディスンという概念は、東洋的に言うと、気という概念に非常に似ていると思います。気とい

う概念にも似ているし、文化人類学的なタームを援用すれば、たとえばコドリントンの提示したマナという概念があります。ものに潜在的な宿っている普遍的かつ神秘的な力がマナです。これはアミニズム以前の話ですが、マナは転移性があるというのが一つの特徴ですから、A から B に、B から C に、C から D に転移していく。つまり、私は奥田先生のメディスンをいただくことができるという話なわけです。

メディスンや聖なる力は、近代以降の西洋の宗教学のなかでも、たとえばルドルフ・オットーみたいな人が出てきて、ダス・ハイリゲ、聖なるものの力を従来のハイアラキカルなキリスト教教学のなかから取り出す形でスポットライトを当てていくし、最近の若い人というか、われわれの世代などが非常に親近感を持ったのは、エリアーデという宗教学者の聖なるもののあらわれ、そのようなものともたぶんメディスンは類縁性、近縁性を持つ概念ではなかろうかと思います。

3. 共同体における実践

さて、このようなメディスンの概念なり自然観なり、環のなかで相互依存している、あるいは相互補完的な関係にあるという考え方は、彼らの日常生活のなかでは、どのように表されているのでしょうか。どのような形をとって、癒しや、聖なる環のなかでの相互補完という考え方が実現されているのでしょうか。そこで2～3の例をお話したいと思います。私はサウス・ダコタがフィールドですから、サウス・ダコタの例でお話しさせていただきます。

たとえばサウス・ダコタのスー族部族社会では、いまだにティオシパエという家族システムがあります。これは英語では、拡大家族と訳していますが、広い親族団体と考えてもいいと思います。この親族団体に認証された者はだれでも、血がつながっていなくても入ることができます。大きなファミリーと考えてください。このファミ

リーのなかに入ると、そのなかにいる限りは生きていけるというシステムになっています。それは大きなファミリーのなかの小さなファミリーの親族呼称を見てもわかります。たとえば私と両親がいるとします。彼らを父と母と呼ぶ。さらに父の男兄弟、つまり、私から見るとおじに当たる人は、みな父と呼びます。また、私の母の女の姉妹はみな母と呼ぶわけです。ですから、私は複数の父と母を持っているし、多くの兄弟姉妹を持つことになるわけです。これは非常に長い間に培われてきたシステムですが、こういうシステムのなかにいる限り、孤児は誕生しないわけです。

多くの先住民部族にも言えることですが、ここにスー族の社会は、「孤児のいない社会」だよく形容されます。実際、生物学的な父母が亡くなっても、他の父や母がいるわけです。祖父母に関しては、すべての祖父母の兄弟姉妹たちを祖父母と呼びますから、また複数の祖父母がいるわけです。こうした核があって、さらにそれがエクステンデッドしていく。養子縁組とか何とかでファミリーがどんどん大きくなっていきますから、私が子どもだとすると、多くの保護者を持つことになります。そういう形で、補完がなされるというシステムが今でも生きています。

ラコタの社会で友人の家を訪ねると、本当に知らない子どもによくでくわします。知らない子どもがその家に預けられている。それは姪や甥ばかりでなく、全くの赤の他人を預かっていたりします。ティオシパエのなかでの協力体制が厳然として生きていて、非常に貧しい社会でありながら、孤児も出てこなければ、餓死者も出てこない。そういう相互補完のシステムをティオシパエという形式が保証していると考えられます。

そして、彼らは実践を忘れないために、絶えず口にする祈りの言葉があります。それはラコタ・スー語で言うと「ミタクエオヤシン」ということになりますが、「われわれはみんながつながっている」ということを、たとえば食事をするとき、儀式を始めるとき、さまざまな場面で口頭に発し

て意識していくわけです。

さらには、非常に寛大な精神が生きています。それはギブアウェイという儀式に表れてくると思っています。ものを与え尽くすわけです。彼らはよく、贈り物は次に贈られるまでは、本当に贈り物にならないという言い方をしますが、贈り物を与える気前のよさ、寛大さは彼らの世界では美德ですから、それがたいへん励行されます。だから、ギブアウェイのような儀式がいまだに行われているわけですが、ギブアウェイに参加して非常におもしろいのは、まったくこれもサークル、円環だなと思います。ものがめぐってくるのです。10年後には、自分があげたものが自分のところに戻ってくるというようなことが現実起きるわけですから、ものが絶えずそういう形で循環していて、理想的には、ない人のところにある人には要らないものが行くというシステムになっているわけです。

このような実践のあらわれ、形は、先ほど平野先生が紹介されたクラックホーンの文化の定義の1つ、デザイン・フォー・リビングにもあてはまります。デザイン・フォー・リビング、つまり文化を、ある意味ではこの伝統の形態、形が表しているのではないかという気がしてきます。

4. 先住民と環境レイシズム

さて、そういう先住民がいま直面している問題に、環境レイシズムという問題があります。環境レイシズムは非常に今日的な問題ですが、ネイティブ・アメリカンの共生の思想や実践を、現実的に阻んでいる問題として認識することができます。環境レイシズムは、単に先住民だけに向けられているものではありません。アメリカでは、いちばん大きなマイノリティ・グループは、人口の約12%に当たるアフリカン・アメリカンです。そうしたアフリカン・アメリカンやチカーノ、先住民など、ピープル・オブ・カラーと言われている有色のマイノリティの共同体に向けて、環境レイ

シズムが押し寄せています。

その中身はどういうことか。簡単にいうと、核のゴミなど非常に有害な廃棄物の処理場、あるいは迷惑施設の立地先として、マイノリティの共同体が狙われているということです。特に典型的なのは、アメリカ先住民の保留地です。保留地では今大変なことが起きているのです。

実は環境レイシズムが進行途上にあったとき、アメリカではクリントン政権が誕生して、ゴアのような自然環境派の副大統領が登場しますから、1994年には環境的公正のための大統領令を發布して、環境汚染の歪みが、弱者やマイノリティグループに集中しないようにする政策が立案されたのですが、ブッシュになってから、京都議定書の例でもよくわかるように、後退せざるを得ないだろうと私は心配しています。

たとえばウラン採掘から核廃棄物まで、核開発のすべての段階で放出される放射能、あるいは毒性のある産業廃棄物が保留地にダンプされるということが、現実にはたくさん起きているわけです。実はこれは今に始まったことではありません。カリフォルニアで金が発見されたのは1848年、1800年代中葉、カリフォルニアでゴールドラッシュが起き、それからずっと金の採掘が行われています。金の採掘の際に、金を分離するために水銀が使われたそうです。その水銀がカリフォルニアに住んでいるインディアン、フーバ族などの川を汚し、湖を汚し、彼らの生活源を枯渇させたのみならず、いまだに水銀の被害が続いている。たとえば先天的に異常を持つ赤ん坊が、異常な割合で生まれたといった事実があるわけです。

古くはそういう例がありますが、昨今の例でいえば、ナバホ族という部族がフォー・コーナースという地域に住んでいます。アリゾナ、ユタ、コロラド、ニューメキシコという4州が州境を接するところに保留地があります。そこには南西部族のホピ族、ナバホ族などの保留地があるのですが、その保留地ではウランが採れます。ある意味ではたいへん不幸なことに、保留地はアメリカ

の全体の面積の2%に過ぎませんが、アメリカのウラン鉱脈の80%がその2%の先住民保留地に集中しています。ナバホの保留地では、大掛かりなウラン採掘が大企業によって行われますが、もちろんナバホの人たちはたいへん貧しいわけです。そのたいへん貧しいナバホの人たちが、保留地外の2/3から半分以下の賃金で駆り出されていって、通常は保護服や保護具をつけるらしいのですが、それもなしに、1940年代以降、数十年にわたって労働に使役された。その結果、ナバホの肺癌の発症率は全米の約5倍です。そして、その周辺地域に住む若者たちの生殖器系の癌の発症率は、全米の平均の17倍だと報告されています。

ナバホ族は特に、環境レイシズムのショーケースだと言われていますが、このような例は至るところにあるわけです。核実験だってそうです。ネバダのアパッチの保留地の近くでさんざん核実験が行われました。核実験やウランの採掘のみならず、今度はゴミ処理施設です。都市社会は、われわれだって自分の町に焼却場ができるのを皆さん反対するわけですが、焼却場がいまアメリカではどこに行っているかということ、まさにアメリカ先住民の保留地なわけです。そういう形で、私の行く保留地でも、本当に侃々諤々の議論の揚げ句、数年前にゴミ処理場を結局受け入れてしまいました。今後、ゴミ焼却による大気汚染、地下水の汚染など、すでに他の保留地が経験している深刻な問題が私が行く保留地でも出てくるのではないかとたいへん心配すると同時に、胸を痛めています。これも貧困なマイノリティに汚染のシワ寄せがなされる例です。

このような環境レイシズムは、何とかわれわれの良識で食い止めなければいけないわけですが、環境レイシズムに対していま一つの運動が起こっています。1990年に先住民民族環境会議が立ち上げられました。これはたとえば先住民だけでも1,000人ぐらい集まる会議です。この会議に多くの環境保護運動家たちが参加して、今後の環境問題の解決に向けてお互いに知恵を共有し合ってい

るという、明るいニュースもあります。先住民たちがそういう深刻な問題に直面しながらも、今後、自然という文化を自分たちの身体のなかにどのように再生させていくかという知恵、指標の一つを提供してくれるのではないかと私は考えます。